

【ポスター発表】

HIV 陽性者への医療ソーシャルワーク支援に関する研究 —支援経験の少ないワーカーへのガイドライン作成に向けて—

大阪人間科学大学 大野 まどか (会員番号 004741)

キーワード：HIV 陽性者 医療ソーシャルワーク 経験の少ないソーシャルワーカー

1. 研究目的

HIV 感染症の治療は 1997 年以降、多剤併用療法の導入と共に大きな進歩を遂げ、予後は著しく改善した。慢性疾患として陽性者が長期療養生活を送るようになったことで、陽性者にはこれまで以上に多様な心理社会的課題が生じている。具体的には、高齢の陽性者、特に合併症等による要支援・要介護者の増加が予想される。HIV 医療と合併症やその他の疾病に対する医療を適切に受療し、さらには介護問題へも対応するためには、医療に関する制度のみならず社会福祉の諸制度、サービスの利用が必要であり、また個々の制度、窓口の連携も大切である。しかしながら、福祉施設や療養型病床の受け入れ拒否、免疫機能の安定した感染者の複数病院での社会的入院の繰り返し、在宅医療体制の不備といった問題が見受けられる。病院の機能分化に伴う平均在院日数の短縮化と療養病床における診療報酬の算定上の問題も地域の療養型施設や介護施設での受け入れをより困難にしており、陽性者の長期療養の場の確保はまだまだ難しい現状である。

さらに、陽性者への社会的偏見・差別は根強く、プライバシー漏えいに対する陽性者の持つ不安等は大きい。アドボカシーの視点とセクシュアリティの理解を踏まえたソーシャルワーク支援が必要である一方、エイズ治療拠点病院のソーシャルワーカーの陽性者への支援経験は十分とは言いがたいことが調査から指摘されている。要因の一つとして、拠点病院の患者数にばらつきがあることである。

そこで、本研究では陽性者の多様な心理社会的課題と、医療ソーシャルワーカーの具体的支援について取り上げ、それらを整理し、陽性者支援の経験の少ない医療ソーシャルワーカーらが共有できような方法を探る。

2. 研究の視点および方法

上述のように、HIV 陽性者の支援にはさまざまな課題があるものの、これまで拠点病院に所属する医療ソーシャルワーカーらによって、1 事例、1 事例、積み上げられてきた支援の実績と経験知があることも確かである。それらのいわゆる経験知あるいは科学知は支援経験を一定程度持つ医療ソーシャルワーカーにとっては自明のものとなっているとも考えられる。そのため本研究では日常的に行っている業務をまずできる限り詳細に浮き彫りにすることを重視した。

エイズ治療拠点病院において HIV 陽性者への支援経験のある医療ソーシャルワーカー 4

名を研究協力者とし、データ収集においては、陽性者支援において踏まえるべき知識、実際に行っている支援(業務)、さらには支援の難しさや課題解決への取り組み、それらに「関係があると考える」事柄を KJ 法を参考に列挙した。さらに、データ分析では、データの整理分類を研究者と4人の協力者とで約6時間(約1時間半×4回)に亘って検討を行った。この過程においては、先に「退院支援」といった枠組みを作り、そこにデータをあてはめていくトップダウン型ではなく、発想的意義を重視した。加えて、カードに記載されたデータの整理分類をしていく作業の中で、個々の業務の意味、留意点等について対象者から得られる語りを IC レコーダーで録音し、新たなデータとして、今後の分析や整理の際に活用することとした。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮として、研究協力依頼時に研究の趣旨等について文書を持って説明した。IC レコーダーによる録音とデータを研究目的のみに使用することについては了解を得て行い、個人情報の保護その他、研究全般において「日本社会福祉学会研究倫理指針」に則った。

4. 研究結果

データとして得られたカードは193枚であった。グループ編成の中では「医療費がいくらかかるのか」「長期療養の場の確保」「セクシュアリティについて」「仲間づくり」「社会参加への支援」「薬物」等21に分類することができた。その後、経験の浅いソーシャルワーカーが実際の支援の中で理解しやすいことを踏まえ、陽性者の感染判明からの生活と支援の時間の流れに沿って、「HIV/AIDSに関する支援を始める前の準備」「HIV陽性と判明した人の受診に関わる支援」「社会生活に関わる支援」「長期療養生活への支援」の4つの項目に分けて整理した。

5. 考察

190余りの業務が挙げられたことから、HIV陽性者への支援において医療ソーシャルワーカーが非常に多様で広範な支援を実際に行っていること、また必要と感じていることが分かった。整理・分析を通して、セクシュアリティやメンタルヘルス(薬物等)への理解、病気について他者への告知に関する問題等の HIV陽性者への支援に特徴的な事柄や留意点が見えてきたと同時に、ソーシャルワーク支援の根底をなす知識、技術、価値が改めて強く必要であることが示唆された。本研究の限界としてデータ分析・整理において協力者間にバイアスが生じる点等がある。

なお、本研究調査は分析継続中であるが、今後、さらにデータの分析整理を行い、支援経験の少ないソーシャルワーカーへのガイドライン作成に向けて研究を進めていく。

本研究は、平成26～28年度科学研究費助成事業の助成を受けて実施した研究業績の一部である(「HIV陽性者への医療ソーシャルワーク支援のガイドライン作成に関する研究」)。